

# 規範と慣用（一） 「発音のゆれと放送用語」

最 上 勝 也

## 一 ことばのゆれとは何か

ことばは時代とともに変化しつづけている。そこで、日本語のゆれや乱れが、しばしば問題にされる。ところで、ことばの「ゆれ」とは何か。

ここでは、第二十期国語審議会報告「新しい時代に応じた国語施策について」（平成七年十一月）の一節から、ことばの「ゆれ」の定義をみてみよう。

ある語が変化する過程で、その語形等について、本来の形に対して拮抗する形が別に生じ、両者が併存する状態になったとき、これを言葉の「ゆれ」と言う。語形のゆれ（アタタカイ／アツタカイ、感ずる／感じるなど）のほか、アクセントのゆれや表記のゆれもある。また、ある語に新しい意味・用法が生じ、本

来のそれと併存する状態をも「ゆれ」と言うことがある。

「ゆれ」は、当初はごく少数の誤用から生じること多い。本来の発音・語形・意味・用法が大多数に支持され安定しているとき、新たに別語形を用いることは、一般に誤用とされる。その別語形の使用者が増加し、ある程度支持されるようになった状態が、いわゆる「ゆれ」であると考えられる。

ことばの「ゆれ」は、ことばが変化する過程の一現象であり、言語学的に使用される用語で、客観的な認識を伴う。一方、ことばの「乱れ」は、世代別・男女別・職業別・地域別・ことばの規範意識の強弱、などで各人のことばに対する乱れ意識は異なる。こちらのほうは、主観的価値判断を伴った認識ということになる。

ところで、音声言語としての放送のことばは、しばしばことばの発音（または読み）が問題となってきた。日本語には発音にゆれがある語が多いが、それらに対して、放送では従来どう対処し、基準

を設けてきたか。筆者は、かつて二〇年近く、NHK放送文化研究所で放送用語の研究・調査に関わり、様々なことばの調査にも従事してきた。本稿では、日本語のゆれの中で、特に放送で問題になった語の発音のゆれを中心に、「規範と慣用」という視点から記述する。

## 二 放送用語と発音のゆれ

大正一四年に東京芝・愛宕山で日本に初めて放送の電波が流れて以来、各地で続々と放送局が誕生したが、昭和の初期は、放送用語としての共通語（当時は「標準語」とも称されていた）はまだ不完全な状態であり、放送で使うことばの表現方法については、各放送局でそれぞれ模索している状態であった。

NHKでは昭和九年に、放送で使うことばを改善向上させることを目的に「放送用語並発音改善調査委員会」（現在の「用語委員会」の前身）を設置した。この委員会では、放送のことばの基本方針について審議するとともに、用語上の具体的な実例をあげて調査し、放送ではどのように取り扱うべきかを検討し、翌年の昭和一〇年に、「放送用語の調査に関する一般方針」を決めた。

### ●放送用語の調査に関する一般方針

#### 総則

一 放送用語の調査は、ラジオ聴取者の共通理解を基準として、

美しい語感に富む「耳のことば」建設し、放送効果の充実をはかることを目的とする。

二 放送用語は、全国中継アナウンス用語（以下「共通用語」と称す）を主体とする。

三 共通用語は、現代の国語の大勢に順応して、大体、帝都の教養ある社会層において普通に用ひられる語彙・語法・発音・アクセント（イントネーションを含む）を基本とする。

さて、この一般方針の総則に続く「二 語彙の調査に関する方針」では、語彙・句法の選択に当たったの一般的準則として、次の一〇項目を挙げている。

### ●語彙の調査に関する方針

・語彙・句法の選択に当たっては、一般的準則として、なるべく左の諸項によること。

イ 現代の口語を第一とする。

ロ 現代の最も普通な発音による。

ハ 現代の最も普通な意味による。

ニ 耳で聞いてすぐわかるものをとる。

ホ 音と調子との美しいものをとる。

ヘ 同音語（又は類音語）の少ないものをとる。

（以下略）

このうち、「発音」に関しては、総則の第三項と一般的準則のイ、口の項に掲げられている。なかでも、一般的準則の口の「現代の最も普通の発音による」という条項は、放送での発音の基準を示すものである。また、「発音のゆれ」については、「発音の調査に関する方針」のなかに、次の項目がある。

・清音と濁音、その他、二様に発音されてゐるものは、その順位（第一以下）を定めること。

「現代の最も普通の発音による」にしても「二様に発音されてゐるものは、その順位を定める」という言い方にしても、一方的に統一するのではなく、世の中に通用する（慣用）発音を、できるだけ放送での発音として採り入れようとする考え方にたっていることが読み取れる。放送用語の調査・研究は組織的に始まってすぐに、このような放送での発音に関する基本方針が打ち出され、それ以後、時代を経ても、この方針が受け継がれてきた。

ただし、「現代の最も普通の発音」は、時代時代の社会情勢を反映して変わっていくものであり、用語委員会の役割は、その時々「最も普通の発音」を見極めることであつたとも言える。

放送での発音をいったん決めても、世間一般の発音とのずれが大きくなると、「最も普通の発音」とは言えなくなる。そこでNHKでは、昭和三八年からは、世間一般の発音の実態をしるために、各

種ことばの調査を実施してきた。この言語調査には、有識者などに対するアンケート、ことばのゆれ全国調査（世論調査）、一〇〇人を対象とする機動調査、インターネットによる調査、そして国語辞書類の調査などがあり、その調査結果のデータと分析は、放送での発音の基準を決めるさいの有力な参考資料にしてきた。

### 三 国の呼称「日本」はニッポンかニホンか

わが国の国号は、漢字で書く「日本」以外にはないが、読み方のほうはニッポンとニホンの両様あり、以前からゆれている。不思議なことに、国（政府）としては、今まで国号「日本」の呼称は正式には決めて来なかったことである（注）。一方、外国の国号で、ひとつの文字表記に複数の異なった発音があるという例は方言系は別として見当たらない。

しかし、放送では、音声言語の運用上、読み方にゆれがある語については、できるだけ統一したほうが望ましい。ニュースなどを読む場合、同一ニュース中に読み方のゆれがあったり、アナウンサーによって読み方がまちまちだったりするのは問題であり、視聴者に混乱を招く場合があるからだ。従って、放送では、読み方にゆれがある語については、一定の基準を作る必要があつた。

前述したように日本で放送用語の組織的な調査研究が始まったのは、昭和九年（一九三四）のことである。その翌年に開かれた、「放送用語並発音改善調査委員会」（以下「用語委員会」とする）で

は、議題として、国号としての「日本」の読み方を取り上げ、審議している。審議の結果は、国号としての「日本」は放送上では「ニッポン」とする、と決定され、この決定は今日に至っている。このときの審議が、NHKが公式に「発音のゆれ」を検討した最初である。なお、この直後に、当時の文部省国語調査会が、国号を「ニッポン」と称する、という案を政府に提出したが、こちらは正式決定には至らなかった。

当時の記録をみると、この委員会では国号「ニッポン」と「ニホン」の発音の違いについて具体例をまじえ13項目にわたって次のように、詳細な分析をしている。

- ・ニッポンは歴史的な発音、ニホンは現代的な発音。
- ・ニッポンは対外的・国家的に改まった気分。ニホンは国内で家庭的にだけ気分。
- ・ニッポンは演説口調のときに出やすい。ニホンは座談気分るときに出やすい。
- ・ニッポンは重く力強い感じ。ニホンは軽くおだやかな感じ。
- ・ニッポンには若々しい元気がある。ニホンには老成な感じがある。
- ・ニッポンは正確な感じ、ニホンはうっかりするとニオンに言いくずされる恐れがある。
- ・ニッポンは野外で声高に適當。ニホンは室内的。
- ・「大」をつけると自然に「ダイニッポン」と読み易いか。特に

国家的な自覚によるとき。

・ニッポンは自覚的、意識的、緊張感を伴う。ニホンは自然に出る形。

昭和二十一年（一九四六）公布の日本国憲法により、日本国が国号として用いられるようになった。その読み方については国家的統一はなく、対外的な表記では多く「ニッポン」（NIPPON）を用いる以外は、「ニッポン」「ニホン」が厳密に使い分けることなく併用され、現在に至っている。

NHKでは、国の呼称「日本」について、今まで三回調査を行っている。このうち、昭和三八年に有識者と一般成人二七〇人を対象としたアンケート調査では、ニホン五二%、ニッポン三九%で、今からおよそ四〇年前でも、ニホンが優勢であった。それから三〇年たった平成五年の世論調査（満二〇歳以上の男女二〇〇〇人を対象）でも、ニホン五八%、ニッポン三九%で、ニホンの優勢は変わらなかった。さらに、年代別にみると、ニホンは二〇代で七割近くあり、若い年代ほどニホンが多くなる一方、ニッポンは高年代で支持され、六〇代以上で逆転している。このように国の呼称「日本」の発音については、世代差がはっきりと現れていることがわかった。（図1 参照）

国語辞書の扱いをみると、多くの辞書はニホン、ニッポンの両様

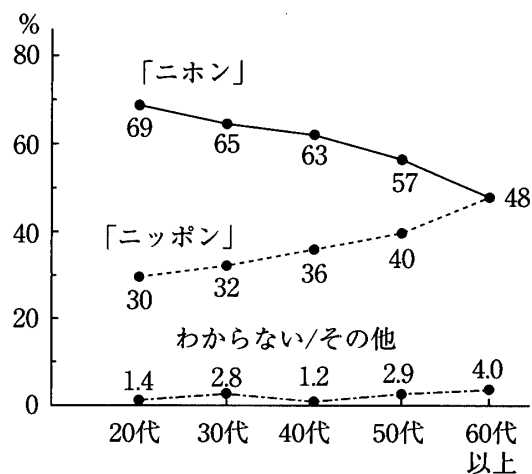


図1 「ニホン」「ニッポン」(年代別)  
(平成5年世論調査)

の見出しを載せているが、平成になって刊行されたいくつかの辞書では、ニッポン→ニホンとして詳しい注釈はニホンの項目に譲っているのが多くなっている(表参照)。

以上、国の呼称「日本」の発音については、世論調査や国語辞書では近年ニホンが優勢であるが、放送では、音声言語の運用上、ゆれが望ましくなく、昭和一〇年以来一貫してニッポンを採っている。

#### 四 「早急」はサッキュウかソウキュウか

「早急」も、現在、サッキュウかソウキュウかで読みがゆれている語である。テレビで国会中継を見ていると、ソウキュウという発

音をよく耳にする。ところが、ニュースではアナウンサーやキャスターは、サッキュウと言うことが多い。どちらが正しい読み方か、という視聴者からの電話や投書が以前からあった。

もともと「早急」いうことばの古くから耳で伝えられてきた発音はサッキュウであったが、「早急」の「早」という漢字は、「早期・早婚・早熟・早春・早期」などのように「ソウ」と言う例が圧倒的に多い。「サツ」という読みで定着している語は、日常語では「早速」の一語しかない。従って「早急」ということばに活字で最初に接した人は、同じ漢字を含むほかのことばの発音の類推からソウキュウと発音する傾向がみられる。

今日ほど活字文化が発達していなかった昔は、新しいことばの多くを、耳のことばとして発音から覚えた。従って、一つ一つのことばの発音は、口と耳で伝承されるのが一般的であった。しかし、文字教育が普及し、活字文化が隆盛を極めている現在、初めて知ることばを目で読むことばとして覚える機会が増えてきた。現在、「早急」という語をソウキュウと読む人が多くなってきたことには、以上のような背景があると考えられる。

ところで、NHKでは、放送開始以来、「早急」の読みはサッキュウだけを採用してきたが、平成三年に第二の読みとしてソウキュウも認めることとなった。これは平成三年の用語委員会が決まったもので、一般の慣用として現在ソウキュウと言う人がかなり増えていること、現行の国語辞書をみても、サッキュウとソウキュウの両

方の読みをほぼ対等に採用していること、などがその主な理由であった。

「早急」の読みについてのNHK部内での検討の経緯をみると、ほぼ七〇年前にさかのぼることができる。まず、昭和一〇年に開かれた「放送用語並発音改善調査委員会」の議題として提案された。案の段階では、第一の読みに「サツキユウ」、第二の読みに「ソウキユウ」が取り上げられ、さらに備考覧には「ソウキユウ」を第一とすれば「サツ」と読むのは「早速」一つになる、と記された。この案は次の委員会で審議のうえ、「早急」の読みは「サツキユウ」のみという正式決定をみた。それ以降四〇年近く、放送では「サツキユウ」という読みを一貫して採用してきた。

この間、昭和四七年の用語委員会には、「早急」という語が放送にも頻繁に登場するようになり、一般にもかなり使われている「ソウキユウ」という読みも認めてはどうか、という形で提案されたことがあった。その時に出た意見に次のようなものがあった

・「サツキユウ」の「サツ」という発音には勢いがあり、急ぐ感じも出るので、この語感を大事にしたい。

・将来とも「サツキユウ」のみを固守することは無理かもしれないが、現段階では「ソウキユウ」は認めたくない。

結果として「ソウキユウ」は認められず、従来の決定の再確認にとどまっていたことがあった。それからおよそ二十年経ち、ようやく平成三年に「ソウキユウ」が第二の読みとして認められたのである。

る。

「早急」の読みについては、NHKでは今まで五回、各種アンケートや世論調査を実施している。この中で有識者を対象とした調査（昭和五十五年と五十八年）では、「サツキユウ」と「ソウキユウ」はほぼ半々に分かれたものの、一般国民を対象とした世論調査（昭和六十三年と平成元年）では、およそ七割の人が「ソウキユウ」を支持していることがわかった。世代別では若い世代ほど、また男女別では比較的女性に「ソウキユウ」を支持していた。

国語辞書類をみると、『三省堂国語』は初版以来一貫して、サツキユウ、ソウキユウ両様の見出しを載せているが、現在のところ、ソウキユウ↓サツキユウという形で伝統的な発音を第一に採っている辞書が多い。ただし、近年刊行された辞書では、両様の見出しを載せているものが増えてきたことが注目される。（表参照）

なお、昭和五十八年に行った全国アナウンサー調査によると、ほぼ全員が「サツキユウ」を採っていることがわかった。放送では現在も、アナウンサーやキャスターは、伝統的な読みの「サツキユウ」を遵守しているが、「早急」の読みについては、放送と一般の慣用との間にやや乖離がみられる語ともいえる。

## 五 「大〇〇」はダイかオオか

阪神大震災以来、「大地震」ということばを目や耳にすることが多くなってきたが、放送では現在、「大地震」の読みはオオジシン

で統一されており、ダイジシンとは言わない。一方、「大震災」の読みはダイシンサイであり、オオシンサイとは言わない。

放送で「大地震」をダイジシンと言うと、一部の視聴者からすぐおしかりの電話や投書が来る。誤読だというのである。ただ、なぜ「大地震」をダイジシンと読むと間違いなのか、その根拠を問われると、なかなか合理的な説明がつけられない。従来、慣習的にオオジシンと読んできただけだからである。従来の慣用だから、これから大多数の人がダイジシンと読むようになれば、新たな慣用が生まれる。慣用とはその程度のものである、としか言いようがない。

接頭語の「大」をダイと読むか、オオと読むかについては、多分に慣習的である。

ただ、従来、一般的な傾向として次のようなことが言われてきた。

(一) 音読みの語(漢語)の前に「大」が付いた場合は、おおかたダイと読む。

大悪人 大英断 大往生 大恩人 大家族 大合唱  
大規模 大群衆 大洪水 大好物 大混乱 大惨事  
大賛成 大事件 大自然 大上段 大勝利 大震災  
大人物 大成功 大多数 大部分 大躍進 大流行

(二) 一方、訓読みの語(主として和語)の前に「大」が付いた場合は、オオと読む場合が多い。

大欠伸 大忙し 大急ぎ 大威張り 大受け 大海原  
大売り出し 大親分 大食い 大芝居 大津波

大手筋 大鳥居 大花火 大広間 大部屋 大目玉  
大割引

(三) ただし、次の例は「大」が音読みの語の前に付いているが、従来、慣用的にオオと読むことになっていた語である。

大一番 大火事 大袈裟 大喧嘩 大御所 大散在  
大地震 大時代 大所帯 大掃除 大騒動 大勝負  
大道具 大番頭 大舞台

(用例は、NHK編新版『日本語発音アクセント辞典』に記載されている接頭語「大」の付く二字漢語から抽出した語である)

(一) (二) のグループの語については、ダイとオオのゆれはほとんどみられない。現在、ゆれがあると思われるのは、(三) のグループにある「大地震」「大舞台」「大時代」などの語である。

そこで、ダイとオオのゆれがあると思われる「大地震・大舞台・大時代・大勝負」の四つの語を調査語に選び、平成元年に首都圏に住む番組モニター一〇〇人と世論調査(「大地震」のみ)を行った。図2にその結果を示したが、「大勝負」を除いて、他の三つの語はいずれもゆれが大きく、全体的として新しい読みダイが、従来の慣用的な読みオオを上回った。さらに、この三つの語の調査結果を年代別にみると、若い年代ほどダイに移行していることがわかった。ちなみに「大地震」については、同じ平成元年に世論調査も行っており、その調査結果を年代別に示したのが図3である。

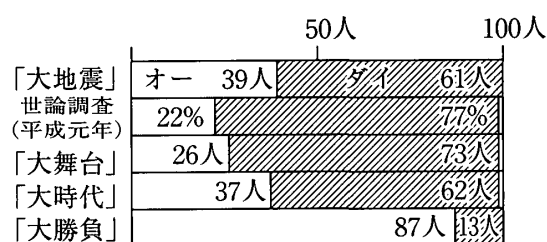


図2 「大〇〇」の読み(平成元年100人アンケート)

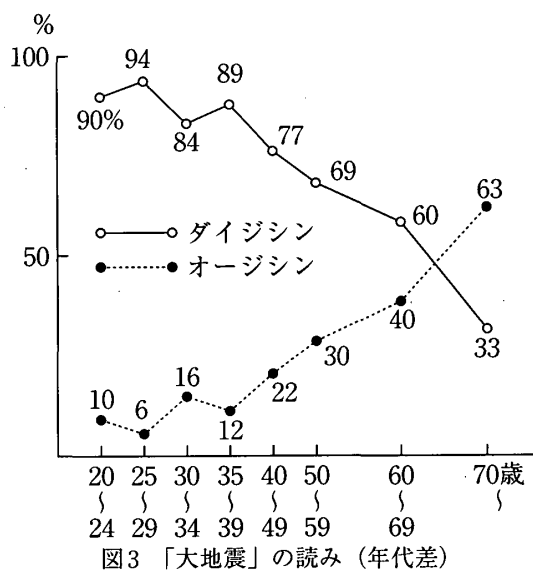


図3 「大地震」の読み(年代差)  
(平成元年世論調査)

以上のことから、「大地震・大舞台・大時代」の三語については、全体として従来の慣用的な読み「オー」が廃れ、新しい読み「ダイ」を採るものが若い年代ほど多くなっていることがわかる。

一方、「大地震・大時代・大勝負・大舞台」の四語を国語辞書類でみると(表参照)、「大地震」は『日本国語大辞典』を除いていずれの辞書も見出し語として載せていなかった。しかも、前掲辞典ではダイジシンを採っている。が、平成に入ってから刊行された辞書を見ると、オオとダイ両様の表記を見出しに採用しているのが多い。また「大時代」はほとんどの辞書がオオジダイでゆれがないが、「大勝負」はいずれの辞書にも項目として載せていない。

「大時代」「大舞台」は、もともと狂言・浄瑠璃・歌舞伎などの

演劇・芝居関係のことばであるが、「大舞台」については、現在では「オリンピック」という大舞台」というように、「晴れの舞台」という意味で使われることも多い。これらの語の読みがゆれているのは、従来「大時代」を除いて、多くの辞書に見出し語として採用されて来なかったことも一因ではないかと推測される。

次に来ることばが音読みの漢語でもオオと読む(三)のグループをみると、「火事・喧嘩・所帯・掃除・道具・番頭」といった、古くから日常生活に溶け込んだ語が多かった。明治期を境に、二字漢語が飛躍的に増えたが、それらに付く「大」は一般にダイと読む傾向が強い。従来、慣用的にオオと読まれてきた(三)のグループにあるいくつかの語がダイに移行しつつあるのは、音読みの語が後に付くときにダイと読む(一)のグループに入ることである。その意味では、一部例外的に残っていた従来の慣用的な読みが廃れ、「大」の読みが一般的な傾向に沿う形で変化しているといえよう。

放送では、現在のところ「大地震・大時代・大勝負」の「大」の読みは、従来の慣用を重視してオオを採っているが、「大舞台」については、平成六年から演劇・芝居分野の「大舞台」は従来どおりオオブタイとし、「晴れの場」の意の「大舞台」の場合はダイブタイも許容している。

#### 六 「存」はソンかゾンか

「依存」「共存」「残存」などの「存」の付く語も、以前からソン

かゾンかで発音がゆれている。「存」の付く語の放送での読みについては、かつて戦前の昭和一六年の用語委員会で次のような決定をしている。

◎「存」の字の読み

(注―「存」には、實在の意味と思考の意味とがある)

A 「ソン」と読むもの

存在(ソンザイ) 存続(ソンゾク) 存立(ソンリツ)

存亡(ソンボウ) 依存(イソン) 共存(キョウソン)

現存(ゲンソン) 残存(ザンソン)

B 「ゾン」と読むもの

存意(ゾンイ) 存外(ゾンガイ) 存知(ゾンジ)

存念(ゾンネン) 存命(ゾンメイ) 一存(イチゾン)

所存(シヨゾン)

C 「ソン」「ゾン」の両用を認むべきもの

生存(セイソン/セイゾン)

ただし、次の場合は「ゾン」を採る。

生存競争(セイゾンキョウソウ) 生存者(セイゾンシャ)

このようなグループ別の語をみると、實在の意味の「存」は「ソン」と読み(Aグループ)、思考の意味の「存」は「ゾン」と読む(Bグループ)傾向があるということが出来る。

「生存」についても、本来的にはセイソンであるが、当時、すでにソン・ゾンの両様を認めており、読みのゆれがあったことを示し

ている。

この「生存」のように、本来「ソン」と読むべき語(Aグループ)が、「ゾン」と濁音で発音される傾向が近年強くなっている。Aグループの「依存・共存・現存・残存」などの語がそれにあたる。このうち「依存」については、かなり以前からイゾンと読む傾向が強く、昭和五五年に行った有識者アンケートの結果をみても、四人のうち三人がゾンを採っていた。前述の四語について、平成元年に行った一〇〇人アンケートの結果を図4に示した。なお、「依存」については、平成元年の世論調査、昭和五五年の有識者アンケートもあわせて示した。これらの調査結果をみれば、「依存」については、現在九割以上の方がイゾンを採っていることがわかる。また、一〇

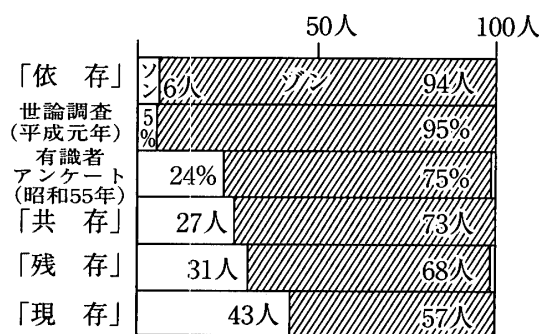


図4 「〇存」の読み (平成元年100人アンケート)

○人アンケートでは、「共存・残存」については七割の人が、また「現存」については過半数の人が濁音「ㄱ존」を採っている。

次に辞書での扱いをみると、近年の国語辞書では、ほとんどの辞書は「ㄱ존」を主見出しとし、注釈中に別形として「ㄱ존」を掲げている（表参照）。これらをみると、国語辞書の扱いの上では、「ㄱ존」が現在でもかなり優勢であるといえる。ただし、『日本国語大辞典』では、「残存」についてはすでに初版（昭和四八）で「ㄱ존」を主見出しに、また『例解新国語』（昭和五九）でも「依存」「残存」についてはいずれも「ㄱ존」を主見出しにしていることが注目される。

放送では、昭和五八年の用語委員会で、「依存」について審議した結果、①イソン、②イゾンと決定、その後「現存・共存・残存」についても、第二の読みとして「ㄱ존」を認めるようになり、現在に至っている。

放送での発音は、昭和の初めから、「現代の最も普通な発音を採用」ことを基本方針に、個々の語について検討されその扱いが決められてきた。その一つ一つのことばの発音は、それぞれの時期の社会情勢を反映し、規範的でもあり、慣用的でもあった。放送での発音は、社会を反映するものであると同時に、社会に影響を及ぼすものでもある。ただ、ことばのゆれに対しては、時代の新しい動きに「半歩遅れて」というのが、放送開始以来一貫して変わらぬ姿勢で

ある。

（注）歴史的にはどうかというと、「日本」という国号自体は奈良時代初期には確定していたと考えられている。しかし、その読み方については、ニッポンが先であったか、ニホンが先であったかで、意見が分かれている。

ニッポンが先だったという説では、奈良時代の初めは中国風で正音としてジトゥボンに似た発音であったが、日本的な慣用音（和音）によって、ニトゥボンに似た発音が生まれ、それがやがてニッポン、ニフォン、ニホンに変わっていったという。一方、ニホン（より正確にはニフォンに似た音）のほうがニッポンより先であったという説では、ニトゥフォンに似た発音がニッフォンになり、その発音から、現在のニッポンとニホンが生まれたという。（講座・日本語の語彙・第11巻）明治書院、1983年、中の柳田征司氏の記述ほか）

#### 〔参考文献〕

・「大地震」をどう読みますか―読みのゆれ―○○人アンケートを中心に―

（最上勝也『放送研究と調査』、平成元年一〇月号）

・あなたは「ニッポン」「ニホン」のどちらですか―ことばのゆれ実態調査から―

（最上勝也、大西勝也『放送研究と調査』平成五年八月号）

（本稿は平成一四年度特別研究費の助成を受けた研究の一部である）

表 発音のゆれと国語辞書 (1)

○印…主見出しとして載せているもの  
 △印…注釈中に載せているもの  
 ↑印…見出しには載せているが、矢印の項目を参照せよというもの

国語辞書	項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
		日 本	早 急	大 地 震	大 舞 台	大 時 代	大 勝 負	依 存	現 存	共 存	残 存										
		ニ ッ ポ ン	ニ ホ ン	サ ッ キ ユ ウ	ソ ウ キ ユ ウ	オ オ ジ シ ン	ダ イ ジ シ ン	オ オ ブ タ イ	ダ イ ブ タ イ	オ オ ジ ダ イ	ダ イ ジ ダ イ	オ オ シ ヨ ウ ブ	ダ イ シ ヨ ウ ブ	イ ソ ン	イ ゾ ン	ゲ ン ソ ン	ゲ ン ゾ ン	キ ヨ ウ ソ ン	キ ヨ ウ ゾ ン	ザ ン ソ ン	ザ ン ゾ ン
日本国語大 (小学館)	初版 (昭 48)	○	○	○	○		○	○		/	/	○	△	○	△	○	△	△	○		
〃	2 版 (平 13)	○	○	○	○	△	○	○		○		/	/	○	△	○	△	○	△	△	○
広辞苑 (岩波)	2 版 (昭 44)	○	○	○	←	/	/	○		○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	
〃	3 版 (昭 58)	○	○	○	○	/	/	○		○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
〃	5 版 (平 10)	○	○	○	○	○	○	○		○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
大辞林 (三省堂)	初版 (昭 58)	○	○	○	←	/	/	○	△	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
〃	2 版 (平 7)	○	○	○	←	○	○	○	△	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
学研国語大 (学研)	初版 (昭 53)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
〃	2 版 (昭 63)	○	○	○	○	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
新明解国語 (三省堂)	初版 (昭 47)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○	△	○	
〃	2 版 (昭 46)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○	△	○	△
〃	3 版 (昭 56)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
〃	5 版 (平 9)	○	○	○	←	○	○	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
岩波国語 (岩波)	初版 (昭 40)	/	/	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○	△	○	
〃	3 版 (昭 54)	/	/	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○	△	○	△
〃	4 版 (昭 61)	/	/	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
〃	6 版 (平 12)	/	/	○	←	○	○	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△

表 発音のゆれと国語辞書 (2)

項目  国語辞書		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10										
		日 本	早 急	大 地 震	大 舞 台	大 時 代	大 勝 負	依 存	現 存	共 存	残 存										
		ニ ッ ポ ン	ニ ホ ン	サ ッ キ ユ ウ	ソ ウ キ ユ ウ	オ オ ジ シ ン	ダ イ ジ シ ン	オ オ ブ タイ	ダ イ ブ タイ	オ オ ジ ダ イ	ダ イ ジ ダ イ	オ オ シ ョ ウ ブ	ダ イ シ ョ ウ ブ	イ ソ ン	イ ゾ ン	ゲ ン ソ ン	ゲ ン ゾ ン	キ ョ ウ ウ ソ ン	キ ョ ウ ウ ゾ ン	ザ ン ソ ン	ザ ン ゾ ン
三省堂国語 (三省堂)	初版 (昭 35)	○	○	○	○	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○		○	△
	〃 2 版 (昭 46)	○	○	○	○	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
	〃 3 版 (昭 57)	○	○	○	○	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
	〃 5 版 (平 13)	○	○	○	○	○	△	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
旺文社国語 (旺文社)	新版 (昭 61)	/	/	○	○	/	/	/	/	○		/	/	○		○	△	○	△	○	△
	〃 9 版 (平 10)	○	←	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
新選国語 (小学館)	6 版 (昭 61)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
	〃 8 版 (平 14)	○	○	○	←	○	○	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	
現代国語例解 (小学館)	初版 (昭 60)	→	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
	〃 3 版 (平 13)	→	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
例解新国語 (三省堂)	新版 (昭 59)	→	○	○	○	/	/	/	/	/		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
	〃 6 版 (平 14)	○	△	○	←	/	/	/	/	/		/	/	○	△	○	△	○	△	△	○
新潮国語 (新潮社)	初版 (昭 57)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○		○	
	〃 2 版 (平 7)	○	○	○	←	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○		○	
新潮現代国語 (新潮社)	初版 (昭 60)	○	○	○	○	/	/	/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
	〃 2 版 (平 12)	→	○	○	○	○		/	/	○		/	/	○	△	○	△	○	△	○	△
NHK 発音アクセント 辞典 (日本放送出 版協会)	昭 18 年版	○		○	/	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○		○	
	昭 26 年版	○		○	/	/	/	/	/	○		/	/	○		○		○		○	
	昭 41 年版	○		○	/	/		○	/	○		/	/	○		○		○		○	
	昭 60 年版	○		○		○		○	/	○	△	○		○		○		○		○	
	平 10 年版	○		○	△	○		○	△	/	○	△	○	△	○	△	○	△	○	△	△